

# 本学初代校長成瀬政男の概略年譜

1898(明31)年		2月3日、千葉県安房郡北条町(現在の館山市)(母の実家)に長男として出生。同郡白浜町(現在の南房総市白浜町)で育つ。	1952(昭27)年	54歳	富士製鉄所釜石製鉄所の歯車修理・製作。
1904(明37)年	6歳	白浜尋常高等小学校入学(1910-明43--年卒業)。	1953(昭28)年	55歳	学士院賞を受ける(歯車の研究による)。
1910(明43)年	12歳	白浜尋常高等小学校高等科入学。	1954(昭29)年	56歳	河北文化賞受賞(製鉄用大型力サ歯車の修理と国産化による)。10月に西独ほか7カ国と米国へ出張
1911(明44)年	13歳	千葉県立安房中学校入学。自ら学費を稼ぎ、毎日32キロの山道を往復8時間本を読みながら歩いて通う。1916(大5)年卒業(18歳)	1955(昭30)年	57歳	出張から帰国。第9回出版文化賞を受ける(著書「歯車の話」)。
1916(大5)年	18歳	平群尋常高等小学校代用教員。ペスタロッチを知る。	1961(昭36)年	63歳	東北大学退官、名誉教授となる。東洋大学工学部専任教授に就任。 新設の中央職業訓練所(現職業能力開発総合大学校長)の初代所長に就任。
1917(大6)年	19歳	恩師の勧めで代用教員を辞し、東北帝国大学工学専門部機械工学科に入学。	1962(昭37)年	64歳	自動車技術会から表彰状を受ける(自動車工業界への業績)。
1920(大9)年	22歳	同工学科を卒業。宮城県立工業学校教諭となるが、この職を辞し、講師として同校に勤務。東北帝国大学工学部機械工学科に入学。	1963(昭38)年	65歳	機械学会名誉員・精機学会名誉会員に推挙される。歯車工業会から感謝状を受ける(業界指導の功績)。
1921(大10)年	23歳	学生のまま佐倉歩兵連隊に入営、この年に除隊。	1965(昭40)年	67歳	中央職業訓練所が昇格・改称し職業訓練大学校となり、初代の校長となる。東洋大学専任教授を辞し、兼任教授となる。
1923(大12)年	25歳	東北帝国大学工学部機械工学科卒業。東北帝国大学部講師となる。歯車の研究を勧められ、研究を始める。その後、大阪の歯車職人溝口良吉に弟子入りする。	1966(昭41)年	68歳	紫綬褒章を受章(新型歯車の開発成功の業績)。
1925(大14)年	27歳	東北帝国大学工学部助教授となる。	1968(昭43)年	70歳	勲2等瑞宝章を受章。
1928(昭3)年	30歳	池田愛子と結婚。	1973(昭48)年	75歳	職業訓練大学校長を辞し、同校顧問となる。
1931(昭6)年	33歳	工学博士の学位を受ける。	1976(昭51)年	78歳	最後の著書「歯車と私」が刊行される。その後、1979年に増補版が刊行される。
1934(昭9)年	36歳	岩波全書「歯車」を刊行し、好評を博す。	1977(昭52)年	79歳	職業訓練大学校構内に成瀬記念公園が完成。科学・技術・技能を象徴し3本の木を植栽される。
1935(昭10)年	37歳	豊田喜一郎から自動車の歯車理論と技術の教えを請われ、後に国産自動車第1号につながる。機構学・機械力学研究のため、欧州諸国に留学。スイス技能教育に感銘を受ける。	1979(昭54)年	81歳	東京・お茶の水の順天堂大付属順天堂病院で心不全のため死去。
1938(昭13)年	40歳	留学から帰国。東北帝国大学工学部教授となる。	1997(平9)年		職業能力開発総合大学校図書館に「成瀬政男資料集」が整理される。直筆原稿中心に400点余の資料集として保管、閲覧に供する。
1941(昭16)年	43歳	印税の私財を投じて学生寮を提供。	2009(平21)年		郷里の千葉県安房郡白浜町(現在の南房総市白浜町)に成瀬政男博士顕彰会が設立される。資料等を白浜公民館に保存。
1942(昭17)年	44歳	北上川ポンプ用歯車の故障修理。	1997(平21)年		職業能力開発総合大学校図書館で第10回企画展の記念展として「本学の礎を築いた初代校長成瀬政男展—職業訓練に尽くした業績とその生涯を顧みる—」を開催。
1944(昭19)年	46歳	朝日文化賞受賞(歯車の研究による)。			
1945(昭20)年	47歳	愛知県刈谷からトヨタ本社に向かって同乗していた自動車が斜面からずり落ち、九死に一生を得る。85日入院、1人のみ生存。最後まで後遺症が残る。			
上記以外の主な職歴		補科学計測研究所員(-昭18-) 文部省視察委員(-昭18-) 中央産業教育審査会専門委員(-昭27~29-) 機械工業審査会専門委員(-昭30-) 文部省初等中等教育局視学委員(-昭35~37-) 経済審議会専門委員(-昭36~38-) 高等専門学校教育課程等研究協議会委員(-昭36~38-) 中央産業教育審議会委員(-昭36~38-)			東京電気大学講師(-昭37-) 文部省教育課程審査会委員(-昭37~38-) 技能検定委員(-昭37~38-) 労働省婦人少年問題審議会委員(-昭38-) 文部省教育課程審議会委員(-昭42~43-) 技能者表彰審査委員(総合審査委員)(-昭42~-) 技社会教育審議会委員(-昭43~-)

※上表の~~~~~部分は、技能・職業訓練・本学に関連する事項。

## 研究・業績・活動

学術論文	特許(発明)	主要著書	新聞・雑誌掲載	ラジオ・テレビ	講演等
1925年~1967年 国内発表論文数 76 国外発表論文数 13 合計 89	1934年~1968年 国内特許件数 50 国外特許件数 10 合計 60	岩波全書「歯車」「ドイツ工業界の印象」「日本技術の母胎」「歯車の研究」「歯車の話」など多数。	連載ものを含めると、500件を超えると推測される。原稿は直筆で書かれている。	NHKラジオ①青年に語る・②人生読本(3回) NHKテレビ①茶の間の科学・②十代とともに等9回	成人式・学会・企業・大学・官庁などで夥しい講演を行う。初代校長としても100回以上という。

# 第1章 出生・少年時代

## 1 出生・家庭・生育

成瀬政男は1898年〈明31〉2月3日、千葉県安房郡北条町(現在の館山市)の母の実家で9人兄弟の長男として生じた。時代は館山に鉄道が開通する11年前である。

父作蔵は白浜尋常小学校の代用教員、母しづは針仕事で生活を営んでいたが、大家族のため貧しい生活であった。政男は白浜町の借家の実家で育てられるが、同居の祖母片山かのから大きな影響を受けた。

政男は小学校卒業に、三越へ丁稚に出ることになっていたが、自ら働いて貯めていた資金を入学金とし、自分が畑仕事して農作物を売って学費とすることで安房中校に進学することになった。

## 2 安房中学校のころ

安房中学校に進学。教科書は知り合いから譲り受け、あり合わせの着物と袴で通学した。白浜から北条町(北条町—現在の館山市)まで往復32キロの山道を毎日8時間かけての通学であった。朝4時、夜明け前に出たという。

この通学時間がもったいないと考え、二宮金次郎の話聞いて、歩きながら本を読んだりして勉強した。夜は学費のため明かりを頼りに農作業をし、「眠くて眠くてしかたがなかった。睡眠が一番ほしかった」と、のころを振り返って述懐している。「寮があれば」と思ったのが後に東北大学の「成瀬寮」の実現につながる。こうして苦学のすえ卒業、小学校の代用教員になった。

## 第2章 曲折を経て東北帝大生へ、青年時代

### 1 小学校代用教員

政男は、かねてから教師を希望していた。平群尋常小学校の代用教員になると、教育へ情熱を注ぎ、熱心に取り組んだ。この時期に同僚からペスタロッチのことを聞き、影響を受け、後にペスタロッチを研究することになる。

満足していた職場ではあったが、1年も経たないうちに、中学校の恩師などから政男の器を惜しまれ、さらに進学を勧められたため政男は辞職する。

### 2 工專一物をつくることのすばらしさを知る

翌年、政男は東北帝国大学工学専門部機械工学科工專)に入学。解析幾何学のすばらしさに魅せられ、学問の有益を知り、嬉々として勉学に励んだ。

しかし、工場実習に弱かったため、「工場で実際に働き、ものをつくってみたい」「工学をおさめた人は実技ができてこそ工業が進歩する」と思い、夏休みに工場で働いた。政男は「物ができること」のすばらしさ、よろこびを知る。教室で学んだ科学・技術とはちがう、べつのものだと考えた。これを「技能」と知るのは後になってからのことである。

### 3 工業高校教諭、東北帝国代大学卒、講師となる

政男は、優等、銀時計をもらって工專を卒業し、宮城県立工業高校教諭となった。ここでも喜んで教育全般にわたって働くが、またまた進学を勧められ、東北帝国大学機械工学科に入学した。数学や物理学講義のすばらしさに酔ったという。在学中に兵役があったが、工專の講師やアルバイトしながらの勉学であった。

卒業後、薦められて同大学の講師となった。

## 第3章 東北帝国大学、歯車の研究時代

### 1 歯車の研究を始め、世界的な研究者へ

東北帝大の講師となった成瀬は、教授から歯車の研究を勧められた。当時、日本では歯車工学は低レベルとみられ、「なんだ、歯車をやるのか」と言われたという。成瀬は歯車理論に数学が合致することを知り、次から次へと新たな理論を構築した。これらを学問として集大成し、歯車の一般理論にまとめた。これがドイツで高く評価され、世界的な歯車研究の第一人者となった。ドイツが評価したことで日本でも一躍注目され、学士院賞を受章する。成瀬は、この間の助教授時代に欧州に留学した。各国の大学や工場を視察し、歯車の研究状況等を見、実りある留学であった。この留学ではスイスの技能訓練に感銘を受けている。

### 2 啓蒙活動ー著書の発行、講演など

成瀬は、歯車の研究を行うかたわら、著作物を数多く刊行している。新聞・雑誌への執筆も極めて多い。「歯車の話」は毎日出版文化賞を受け、岩波全書「歯車」「ドイツ工業界の印象」「日本技術の母胎」はすばらしい売れ行きであった。講演も各種数多くこなし、啓蒙活動を活発に行った。

### 3 自腹をきって学生寮を提供

学生から、学生寮が欲しいという要請を受けた成瀬は、大学当局と交渉したが全く見込みがないため、著書の印税1万5千円で仙台市にある既存物件を買うことにした。しかし、価格は5万円だという。ねばり強く交渉した結果、不足分はあるときなし返済の条件で取得し、これを学生寮にあてた。これは少年時代に毎日32キロの山道を歩いて通った思いからであった。残念ながら、この寮は焼失した。後に成瀬が東京に転居し、仙台の自宅を学生寮とした。この寮を「成瀬寮」という。

## 第4章 職業訓練の構築、本学初代校長時代

### 1 中央職業訓練所長に就任

成瀬は東北大退官を間近にしたある日、労働省幹部の訪問を受けた。「今度、日本で初めて職業訓練の高度な専門教育・訓練機関をつくるので、所長になっていただきたい」という要請であった。それより先に東洋大学の教授を引き受けていた成瀬はこれを固辞した。労働省側は手を尽くして説得にあたり、三顧の礼をもってようやく所長就任が実現した。仙台から妻と2人、そして猫1匹で上京した。

当時の朝日新聞は「人」欄で、技術教育一筋の成瀬はうってづけの人事である、と書いている。

### 2 中央職業訓練所長に就任、その後に初代校長に

職業訓練は初めての成瀬は、「職業訓練とは何か」から取り組む。そして物をつくること、人をつくることの重要なことに改めて認識する。そして職業訓練の基本理念をまとめ、職業訓練所のみでは不十分であると考え、大学昇格の運動を行った結果、職業訓練大学校に昇格した。

さらに、内容を充実させ規模を大きくするため、大学校移転についても熱心に取り組み、これも実現させ初代の校長となった。職業訓練大学校の象・本論・将来計画・構想・教育訓練方針など表し、各所で講演活動を積極的に行うなど、まさに本学の礎を築いた人といえよう。

### 3 成瀬理論の科学・技術・技能

成瀬は、仙台の工専時代に物をつくることのすばらしさ、よろこびを知る。「物をつくる、ということは科学

や技術の学問とはちがう、これはべつのものである」と考えたが、職業訓練を知ってこれが「技能」であることと認識したと思われる。そして、「科学と技術と技能がなければものをつくることができない、どれが優位というこではなく、この三者は同列である」とした。

ものづくり＝「科学」＋「技術」＋「技能」は本学の校章・シンボルとなっており、今や私たちの大きなバックボーンとなっている。

さらに成瀬は言う。この三つに「創意工夫」と「職業訓練」が必要である、と。創意工夫と職業訓練によって技を磨けばよりよいものがつくられる、だからこそこの五つが重要である、と説いている。

#### **4 技能、幸福のモデル**

成瀬は一貫して人類の幸福を訴えた。ものをつくることは、幸福のためであり、ものをつくることから悪を取り去ることが必要だとした。職業訓練の仕事に就いてからのほとんどの講演に「技能のモデル」あるいは「幸福のモデル」などという名称のものが使用された。このモデルは、人類が太古から物をつくってきた発展段階と幸福との関係などを表したものである。この成瀬理論は成瀬の根本思想、哲学でもある。

# 第5章 成瀬政男の思想と人となり

## 1 生涯を貫いた思想

成瀬は幼少のころいつも母方の祖母片山かこのの側にいて話を聞かされ、強い影響を受けたようである。父の教員という仕事、貧しい生活、苦学の少年時代、周囲からの暖かい支援、仏教・キリスト教、ペスタロッチなどが成瀬の思想形成の基となっている。

成瀬が生涯貫いた思想の一つは、教育訓練・ものづくりである。次ぎに、人の幸福・命の大切さで、これも成瀬の根底思想ともいえよう。三つ目は、恩・感謝であり、「自分が今あるのは全て周囲から支えられてきたから」と常に語っている。

## 2 成瀬政男の人となり

成瀬の生涯は、常に一‘所’懸命で貫いた。その場、その場でいつも全力を尽くして事にあたった。驚くべき頑張りイズムである。そして恩師など周囲の薦めに素直に従い、感謝の気持ちを持ち続けた。

父に仕送りしたり、洋服を贈ったりし、母の病には少年ながら水をかぶってお百度参りするなど父母への孝行。そして学生への寮の提供行為からも成瀬の人となりが知ることができる。

成瀬は、努力の人である。決して順風満帆の人生ではなかったが、崇高な人生をおくった偉人といえよう。

